

3月22日(日) サムエル記第一30章26～31節

「すなわち、ダビデとその部下がさまよい歩いたすべての場所の人々であった。」(31節)

ダビデは、アマレク人に攻撃されたツィクラグに帰り、友人であるユダの長老たちに贈り物として戦勝品の一部を送りました。戦いに直接出た者たちだけではなく、戦いに出なかった者たちにまでダビデは戦勝品を送ったところに、戦いに勝利することができ、受けた物はすべて主の恵みであるとのダビデの信仰を見ます。27節～31節の前半に、送付先の町の名が記されていて、31節の後半には「すなわち、ダビデとその部下がさまよい歩いたすべての場所の人々であった。」とあります。つまり、ダビデがサウルによって命を狙われ、あちらこちらをさまよい歩いていた時に、彼を助けたり、援助したりした人たちのいた町々だったのでしょう。ダビデは、これらの人々のことを決して忘れなかったのです。

私たちが一人で信仰生活を送っているのではなく、多くの兄弟姉妹によって助けられ、祈りをもって支えられているのです。特に、ダビデがサウルの手から逃れるためにさまよい歩いたように、私たちが信仰の歩みの中で、いつ解決されるのか分からないような困難の中をさまよい歩いたような経験は一度や二度ではないでしょう。その中であって、主が恵みをもって導き、兄弟姉妹たちが常に守り支えてくださったことを決して忘れたくないと思いますし、もし私たちが立ち直ったなら、今度は私たちが周りの兄弟姉妹を恵みによって支えていくことができたら幸いですし、このような交わりを私たちが教会の中で形造ってまいりたいと思わされます。

3月23日(月) サムエル記第一31章1～7節

「道具持ちは、サウルが死んだのを見ると、自分も剣の上に身を伏せて、サウルとともに死んだ。」(5節)

場面は、ペリシテ人とイスラエルとの戦いに移り、イスラエルはペリシテによって敗走させられます。そして、最初にサウルの三人の息子の死が語られています。三人の息子たちが戦死した結果、攻撃はサウルに集中し、射手たちがサウルを狙い撃ちした結果、彼は射手たちによりひどい傷を負うこととなりました。サウルは、自分の道具持ちに、自分を殺すように命じます。サウルは敵の手で殺されたり、捕虜とされてなぶり者にされることを恐れたのです。道具持ちが躊躇していると、サウルは自ら剣の上に倒れこんで自害し、道具持ちもサウルの後を追って自害しました。

サウルは、神のおきてを破って自分でいけにえをささげたり、アマレクを聖絶せよと命じら

れているにもかかわらず、一部を残しておき、そのことをサムエルに指摘されても、決して悔い改めることなく、主にいけにえをささげるために良い物を残しておいたと言い訳しました。そして主は王位をダビデに譲られたことを知りながら、彼の命を狙い続け、最後には霊媒師のところへ行き、サムエルを呼び出す罪を犯しました。まさにサウルは、人生において数多くの罪を犯してきました。その罪の結果が、サウルのみじめな死につながったと言えます。まさに、その人の最後は、その人の人生を語っていると言えます。

私たちは、最後にどのような人生を迎えるでしょうか。まさに私たちの人生の歩みそのものが、ある意味人生の終わりを迎えるための備えと言えます。別に葬儀に多くの方に来てもらって別れを惜んでもらえるようにということではなく、最後まで主に従い通すことで、主に祝福され、主の栄光を現わすような人生の最後をともに迎えようということです。私たちは、主に従うことで祝福された最後を迎える備えが日々なされているでしょうか。

3月24日(火) サムエル記第一31章8～13節

「そこで勇士たちはみな立ち上がり、夜通し歩いて行き、サウルの死体と息子たちの死体をベテ・シャンの城壁から取り下ろし、ヤベシュに帰って来て、そこでそれらを焼いた。」(12節)

8節でペリシテ人は、何か戦利品になりそうなものはないかと思って、戦闘の起こった場所に来たのでしょう。その時に、サウルと三人の息子たちがギルボア山で倒れているを見つけ、サウルの首を切り、武具をはぎ取りました。そのことをペリシテの全域に知らせます。9節に「偶像の宮」と出て来るのは、当時の戦いが神々の戦いであると信じられていたからであり、まさにペリシテの神々が、主なる神に勝利をしたということなのでしょう。そしてサウルの武具はアシュタロテの神殿に奉納され、サウルの死体はベテ・シャンの城壁にさらされました。ベテシャンは当時の交通の要衝で、そのようなところにサウルの死体をさらすことで、さらし者にしようということだったのでしょう。罪の結果、神のさばきによりペリシテによって討ち取られたサウルの死は、異邦人であるペリシテ人の辱めを受けることとなりました。罪を悔い改めず、罪に罪を重ねる歩みは、決して周りの証しとはならず、むしろ主の御名を汚すことになるのです。

しかし、ヤベシュ・ギルアデの住民は、そのことを聞き、夜通し歩いて行き、サウルと息子たちの死体を城壁から取り下ろし、ヤベシュに帰って、死体を焼き、骨を取って、ヤベシュにあるタマリスクの木の下に葬り、七日間サウルと息子たちの死を悼んで断食しました。なぜヤベシュ・ギルアデの人たちがここまでしたかと申しますと、サムエル記第一11章を見ますと、サ

ウルが王になって初めての戦いで、ヤベシュ・ギルアデの人々をアンモン人の虐げから解放したのですが、ヤベシュ・ギルアデの人々は、そのことを決して忘れてなかったのです。人の罪の性質として、人からされた良きことは忘れやすいものです。しかし私たちは人から受けた恵みや愛を決して忘れることなく、今度は周りの人への恵みや愛として報いてまいりたいと思わされますし、何よりも主ご自身が私たちに常に大いなるみわざをもって、恵みとあわれみを注ぎ続けてくださいます。その主の恵みを私たちは決して忘れない者でありたいと思わされます。

3月25日（水）サムエル記第二1章1～12節

「ダビデは自分の衣をつかんで引き裂いた。ともにいた家来たちもみな、そのようにした。」

（11節）

1節を見ますと、ペリシテとの戦いでサウルが自害したことで、ダビデがアマレクの略奪隊を打ち破ったことは同時並行で起こった出来事だったようです。ダビデは、アマレクを打ち破った後、戻って来たツィクラグに二日間とどまっていました。2節を見ますと、滞在三日目に一人の男がサウルのいた陣営からダビデのところへやって来て、地にひれ伏して礼をしました。「衣は裂け、頭には土をかぶっていた」というのは、当時の嘆きの表現です。そして4～5節で兵たちが逃げ、サウルとヨナタンを含め、多くの者がこの戦いで戦死したことを告げます。サウルとヨナタンの死をどのように知ったのかと尋ねるダビデに、6節から彼はサウルの死の状況を告げます。しかし、6節の彼の説明とサムエル記第一31章1～3節の説明とは合致しません。また8～10節にも同じサムエル記第一31章4節と一致しないところがありますし、ダビデもこのアマレク人の嘘にすぐに気がついたと思われれます。そもそも王が命をとるように頼むのであれば、誰でもいいというわけではないはずで、王のそばには必ず道具持ちがいますので、もし介錯を頼むのであれば、その道具持ちに頼んだはずだとダビデは思ったことでしょう。そして、もう一つが、イスラエルに寄留していた異邦人であるアマレク人に自分を殺すように頼むこともありえないことでした。そして、このアマレク人は、サウルの死の証拠として頭にあった王冠と腕についていた腕輪を取って、ダビデのところへ持って来たと言います。ダビデとサウルの敵対した関係を知っていたアマレク人は、ダビデがサウルの死を喜び、サウルの命をとった自分に対して褒美を与えてくれると期待したのかもしれません。ところが、ダビデは自分の衣をつかんで引き裂き、「サウルのため、その子ヨナタンのため、また主の民のため、イスラエルの家のために悼み悲しんで泣き」とあり、このアマレク人が期待していたのは、正反対の反応を示します。

ダビデが、ヨナタンのために、その死を悼み悲しむというのは理解できます。しかしダビデは、自分の命を狙っていたサウルの死をも悼み悲しみ、主の民のため、イスラエルの家のためにも悼み悲しんだのです。ここにダビデの信仰から出ている他者への愛とあわれみを見ます。私たちも、このような敵をも愛する愛を、そして主の民である兄弟姉妹に対して分け隔てなく示せる愛を持ち合わせているのでしょうか。それとともに、ここで深く教えられたことは、ダビデとともに家来たちもみな、サウルの死を悼み悲しんでいるということです。もしこれまでであれば、家来たちはサウルの死を喜び、安堵したのではないかと思います。しかし、家来たちもダビデの思いを共有するようになっていたのでしょうか。私たちが思いを共有するお方は誰でしょうか。それは父なる神様です。父なる神様のみこころを私たちの心構えとして歩んでまいりたいと思わされます。

3月26日(木) サムエル記第二章13～16節

「主に油注がれた方に手を下して殺すのを恐れなかったとは、どうしたことか。」(14節)

出自を尋ねるダビデに、「私はアマレク人で、寄留者の子です。」と答えました。その若者に対してダビデは、「主に油注がれた方に手を下して殺すのを恐れなかったとは、どうしたことか。」と言い、彼は討たれて死んでしまいます。主に油注がれた方に手を下して殺すのを恐れるとは、油注ぎが、主の主権による選びを通してなされたことをおぼえて、油注がれた者を主にあって敬うということです。サウルについては、何の落ち度もないダビデの命を狙うという考えられない暴挙に走りましたが、それでもダビデは、主の選びによる油注ぎとサウルが王として召されたことのゆえに、彼を敵と考えたり、命を取ろうなどとは決して考えることはありませんでした。私たちが決して間違っはならないことは、主によって油注がれるということは、その人が完璧な人格の持ち主であることを意味しないということです。もちろん主の召しにより油注がれ、主の職務に就く者たちも決して完璧ではありません。目につく落ち度があるかもしれませんし、召しを疑うようなことがあるかもしれません。しかし、主の召しが確かであることを自分も周りも確信したなら、召された主に信頼し、すべてを主にゆだねるべきです。主がすべてをご自身のみこころのままに導かれます。人は決して自分の思い、考え、好み、願いなどによって主の召しに介入することがあってはなりません。もしそうしたなら、その人自身が主によって責任を問われることとなります。このアマレク人の若者は、召された者の死に関与したと告げたことにより、ダビデに討たれることとなりました。それと同様に、油注がれた者を敬わない、主への恐れなき態度は、その身にわざわいを招くこととなります。

3月27日(金) サムエル記第二1章17～23節

「イスラエルよ、君主はおまえの高き所で殺された。ああ、勇士たちは倒れた。」(19節)

ダビデが、サウルとヨナタンのために歌った哀歌は、18節を見ますとヤシャルの書にまさしく記してあるとあります。このヤシャルの書とは聖書が編纂される前にさまざまな記録を集めたもので、ヨシュア記10章12～13節にも出てまいります。さらに「これはユダの子らに弓を教えるためのもので」とありますが、その意味は、これからイスラエルの兵士たちによって、この二人の人物が伝説の戦士として覚えられていき、この二人のようになることを願いながら、弓の訓練にも励むということです。

19節の君主とはサウルのことを指し、おまえの高き所とは、サウルとヨナタンが最後を迎えたギルボア山を指していると思われます。そして「ああ、勇士たちは倒れた」と言い、死という表現をダビデはあえて使わないように避けているのかもしれませんが、このようなかたちでイスラエルの敗北に対する嘆きを表現しています。20節のガテとアシュケロンは、ペリシテの町です。つまりペリシテの町々に自軍の勝利を知らせるなど言うのです。それは、ペリシテ人を喜ばせないためにとということです。ダビデがゴリアテを倒した後に、イスラエルの女たちによって歓喜の声をもって迎えられました。このように、どこの国においても勝利を祝って、歌ったり踊ったりする女たちが兵士たちの凱旋の列を迎える様子が見られました。あえてダビデは、異邦人のペリシテ人を無割礼の者たちと呼び、彼らを喜ばせないためにと言います。21節で「ギルボアの山よ。高原の野よ。おまえたちの上に、露は降りるな。雨も降るな」との表現は、イスラエルだけではなくどこの国においても、自国の人々を悼む表現として広く用いられていたようです。「そこでは勇士たちの盾が汚され、サウルの盾に油も塗られなかったからだ」とは、当時の盾は皮でできていましたので、本来であれば油を塗ることで光沢を出したり、矢をはねのけたりしていたようですが、恐らく敵の攻撃があまりにも激しくそのようなことをする余裕すらなかったということだったのかもしれませんが。

この哀歌を読み返しながら思わされましたことは、ダビデが哀歌を歌い、彼がサウルとヨナタンの死を悼み、悲しんでいます。主ご自身の哀歌でもあるように思えました。すなわち、主によって油注がれたサウルが、もし主に従う道を選び取り、そして罪が示されたなら、それを謙遜に悔い改めていたなら、このような最後を遂げることはなかったからです。主は、私たちの人生の最後を思いながら、今私たちのことを嘆き悲しんでいることはないでしょうか。私たちは、最後まで主に従い通すことで、御国を思いながら人生の最後を迎えることができるでし

ようか。今日、もう一度自らの信仰の歩みを主の御前に省みましょう。

3月28日(土) サムエル記第二1章24～27節

「あなたのために私はいたく悲しむ。私の兄弟ヨナタンよ。あなたは私を大いに喜び樂しませ、あなたの愛は、私にとって女の愛にもまさって、すばらしかった。」(26節)

24節で「イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。」と言います。それは「紅の衣を華やかにおまへたちに着せ、おまへたちの装いに金の飾りを着けてくれた」からです。これらの豪華な着物と金は繁栄を意味しています。つまり、サウルは王として豊かな繁栄をイスラエルにもたらしたということです。そのことを思い、サウルの死を悼み悲しんで、喪に服すようにと呼びかけています。25節において19節と同じ表現が繰り返された後、26節でヨナタンに対するダビデの悲しみが表現されています。ここでヨナタンとダビデの愛を奇妙な愛と呼んだり、女にまさる愛との表現から、ダビデとヨナタンが同性愛者であったと言う人もあり、ここを根拠に聖書は同性愛を認めていると主張する人もあります。しかし、ここでダビデの言う愛とは、決してそのような愛ではありませんでした。むしろ、ダビデが信仰をもってゴリアテを倒し、信仰により敵に勝利する姿にヨナタン自身が敬意を含んだ愛情を向けていたと考えるべきでしょう。ですから、以前にも記しましたが、ダビデとヨナタンは、まさに信仰によって結びついていて、信仰による深い愛を互いに持っていたのです。私たちも教会の中で愛を語りますが、私たちは教会の兄弟姉妹の間に語られているような愛が見られるでしょうか。それは、主を信じるがゆえの愛であり、信仰によって一つとされているところから来る愛です。そして、この愛は必ず互いの違いや感情的なものを乗り越えさせる愛です。私たちも、ダビデとヨナタンの間にあった愛を周りの兄弟姉妹と持たせていただきたいと思わされます。